


	学部長	学 長
閱 覧		

国 外 派 遣 研 究 員 報 告 書

令和6年11月27日

國學院大學学長 殿

所属・職名 文学部史学科・教授

氏 名 神長 英輔 

令和 6 年度 国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1 派遣期間 (期間延長のある場合は含めて下さい)

令和 6 年 4 月 1 日 から 令和 6 年 9 月 30 日 まで

実際の出国日 令和6年 4 月 3 日 同帰国日 令和6年 9 月 23 日

2 受入先研究機関など

ウラジオストク国立大学 (受入先研究機関)

ロシア国立歴史文書館極東支部

沿海地方国立文書館

沿海地方公共図書館

3 研究目的

申請書にて届け出た通り、20 世紀前半のロシア極東における日本観についての研究を実施した。ただし、ロシアの知人の研究者から、「現在のロシアの政治的な状況を踏まえるなら、ロシアをめぐる国際関係に関わる研究課題をロシア当局に届け出るのは避けた方がよい」という助言を受けたため、招聘状の申請や受け入れ先の研究機関に対しては、上記の研究課題と並行して研究を続けている「19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての昆布貿易」を研究課題として提出し、前者 (日本観) の研究に重点を置きつつ、二つの研究課題に取り組んだ。

4 派遣中の研究概要

ビザ更新申請のための一時帰国時を除き、ロシア滞在中のすべての期間、ウラジオストク市に滞在し、上記に列挙した文書館と図書館で所蔵資料の調査と収集を進めた。ウラジオストクの資料状況がよかったので、計画していたハバロフスク市滞在はキャンセルした。

ロシア国立歴史文書館極東支部では、1910年代から1920年代にかけて漁業関係機関が作成した文書を閲覧した。日露戦争の結果であるポーツマス講和条約によって日本はロシア極東沿岸地域における漁業権を獲得した。この新しい状況に対応するため、ロシア政府は、日本の漁業者の管理を目的して行政機構を再編した。こうした動きを受けてロシア革命前後に設置されたのが極東漁業管理局であり、この極東漁業管理局の報告書には、日露戦争直後からシベリア出兵期の極東の漁業に関する日本政府の対応と、それへの評価が詳述されており、外交文書などからは知りえない、極東のロシア当局の日本観を知ることができた。

沿海地方国立文書館も、上記の文書館と同様に、漁業関係機関の文書を多く所蔵している。ここでは、シベリア出兵とその前後の、ロシア極東の漁業をめぐる日本とロシア当局の紛争について記した漁業関係機関の文書、特に極東漁業管理局の報告書を閲覧した。文書からは、ロシア極東における漁業とはいえ、ロシア側が当地での日本の漁業者による活動を十分に把握していなかったことが理解できた。

戦前期のロシア（ソ連）領内における日本の漁業者による漁業、すなわち露領漁業や北洋漁業については、これまで日本側で多くの研究が進められていたが、そのほぼ全ては専ら日本で作られた日本語の資料に頼るものだったため、今後はロシア側の史料と日本側の史料を突き合わせて検証する作業が必要になる。今回の閲覧により、そうした作業の第一歩が踏み出せたと考えている。

ただし、ロシアの文書館の所蔵資料は、作成者と大まかな主題で分類されているため、目録がウェブサイトや公刊書籍などで公開されていたとしても、請求して現物を閲覧しないと文書の具体的な内容がわからないことが多い。上記の二つの文書館については、後者が文書目録を公刊しており、後者の資料調査に際してはそれを手がかりにすることができるが、それでも相当の時間を要した。ロシアの文書館は通例、文書の閲覧の申請から受領まで3営業日から4営業日を要するため、短期の訪問では多くの文書を閲覧することができない。今回はそれなりに時間に余裕があったが、まだ研究は途上であるため、引き続き機会を得て閲覧を試みたい。

4 派遣中の研究概要（続）

上記の文書館での作業と並行し、沿海地方公共図書館では、シベリア出兵に関わる書籍や定期公刊物（雑誌論文・雑誌記事）を閲覧し、複写した。上記の文書館のうち、多くの有用な文書を所蔵する沿海地方国立文書館は郊外に位置し、滞在していた市内中心部のアパートからは公共交通機関で片道1時間半程度を要した。一方、沿海地方公共図書館は徒歩圏にあり、また、請求から10分程度で図書が出てきたため（ロシアの図書館は基本的にすべての書籍が閉架で所蔵されている）、この図書館を頻繁に利用した。

ソ連期に日本に関する20世紀のロシアの文献を整理して編纂した書誌が発行されており、今回はこの書誌を手がかりとして、シベリア出兵に関してソ連で1950年代前半（スターリン批判以前）までに出版された書籍と雑誌記事・雑誌論文を大量に収集した。ロシアの図書館では、所蔵資料の撮影が自由であり、また、顔見知りになった図書館員がさまざまな形で便宜を図ってくれたため、作業は順調に進んだ。

シベリア出兵に関する文献は多くあるが、ソ連期の場合は、研究者による学術研究ではない、一般向けの本が多く出版されていることが特徴的である。また、スターリンへの権力の一元化が進むのと並行して、出来事の叙述における多様な視点が失われていくことも見て取れた。これらの発見は、あくまでも作業途中の仮説なので、今後、撮影した資料を精査してこの仮説を検証していきたい。

また、ソ連はさまざまな差別に対して公式には体制として批判的な姿勢を取っていたが、その一方で、今回閲覧したさまざまな資料においては、帝政期以来の人種差別も含めた日本人に対する差別的な表現が散見された。ソ連は多民族国家であり、形式的にはすべての民族の平等をうたっていたが、当然、限界があり、こうした差別的な表現も残っていた。こうした差別的な表現の実態を整理して把握し、それを前後の時代（帝政末期や革命期、1950年代後半以降）の状況と比較する作業を今後進めたい。

並行して進めていた昆布貿易についても、文書館と図書館で関係する資料を利用することができた。この課題については、研究成果として単行本の執筆の段階にあり、ウラジオストク滞時に資料を利用しながら執筆を進めることができた。すでに本の3分の2を書き終えたので、帰国後の国内派遣研究期間に書き終えたい。

5 その他の活動

6月3日には、ウラジオストク国立大学の受け入れ担当教員である国際ビジネス経済学部のナタリア・ユルチェンコ准教授の授業に招かれ、ゲスト講師として近現代の東北アジアにおける昆布業と昆布貿易の歴史について講義をした。また、6月6日には、沿海地方公共図書館のプーシキン生誕250年記念イベント（詩のコンサート）に招かれ、プーシキンの詩の日本語訳を朗読した。

6 今後の研究計画

シベリア出兵に関する科学研究費補助金のプロジェクトに研究分担者として参加しているので、この研究の途中経過をこのプロジェクトの研究会で報告する予定である。また、このプロジェクトで予定している研究成果の刊行に向け、論文の執筆を進める。また、さらに資料を収集するため、モスクワやサンクトペテルブルクの図書館や文書館への渡航も計画している。

7 感想・所感

ロシア極東には、日本に近いこともあり、日本に関心がある人々や日本を訪れたことがある人々が多い。すでに知っていたことではあるが、改めて数か月間暮らし、生活の中でさまざまな人と関わることでそれを実感した。また、ロシアは戦時中だが、この戦争がロシアの一般の市民の日常生活に及ぼす影響が限定的であることも実感した。現在、日露間の政治的な関係は冷戦後で最悪の状況にあり、日本がロシアに対する経済制裁を実施している。しかし、私がさまざまな一般の市民と関わった中で日本に対する否定的な言明を聞くことは全くなかった。

その一方で、直行便がなくなったため乗り継ぎによって多くの時間と費用を要したこと、査証の有効期間が最大でも3か月に限られたこと、日本出国時に詳細な税関手続きを要したこと、ロシア入国時に別室で詳細な尋問を受けたこと、日本国内発行のクレジットカードが使えないことなど、出入国や生活に際してはさまざまな不便があった。

ウラジオストク国立大学は、このような時期にあっても、日本からの研究者の訪問を快く受け入れ、研究や生活において多大な便宜を図ってくれた。また、日本政府が日本からロシアへの渡航の自粛を呼び掛けている中であって、本学は私のロシア滞在を許可して支援してくれた。学問の自由を尊重し、貴重な研究滞在の機会を私に与えてくれた両大学の関係者に対し、この場を借りて心からの感謝の気持ちを伝えたい。